

三つの問いから 批判的思考力育成について考える

琉球大学教育学部 教授

道田泰司 (みちた やすし)

Profile — 道田泰司

1988年、広島大学大学院教育学研究科実験心理学専攻博士課程前期修了。同年、広島大学助手。1991年、琉球大学講師。助教授を経て、2007年より現職。専門は思考心理学、教育心理学。著書は『最強のクリティカルシンキング・マップ』（単著、日本経済新聞出版社）、『批判的思考力を育む』（共編、有斐閣）、『言語力が育つ社会科授業』（共著、教育出版）、『クリティカル進化論』（共著、北大路書房）、『クリティカルシンキング』（共訳、北大路書房）など。



近年、ビジネス書を中心に、発想法や〇〇シンキングなど考える力を高めるための本が多数出版されている。それを見ると、思考について研究している筆者としては、「ああやっぱり考えることの大事さが認識されているんだなあ」とうれしくなる。その反面、あまりに多いので、どれをどこまで見たらいいのか判断がつかず、困ってしまうのも正直なところである。とりあえず売れ筋の本を買ってみると、すでに持っている本と同工異曲だったりして、じゃあこの手の本はもう見なくていいかなと思っていると、たまたま手にした本が、新しい切り口を持っていて参考になったりするのでそうも言っておられず、悩ましい限りである。

ひょっとしたら皆さんのなかにも、同じ思いを持っている人がいるかもしれない。それに加えて、本によって書かれていることが違ったりすると、「どうしたらいいの?」とか、「そもそも〇〇シンキングって何?」などと混乱しているかもしれない。

そこで本稿では、批判的思考（クリティカルシンキング）の育成について、どのように考えたらいいのか、筆者なりに整理してみた。ここでは、学校の教師など他者の思考力を育成する場面を念頭に置いているが、自分自身の思考力を高める場合も参考になるだろう。

なお〇〇シンキングと銘打たれた本のなかで最も多いのは「ロジカルシンキング」だが、「クリティカルシンキング」も1996年に最初の

翻訳書が出版されて以来、ほぼ毎年、複数の本が出されている。ベースになっているのも心理学、論理学、哲学、ビジネス系コンサルティングとさまざまである。クリティカルシンキングは「21世紀型スキル」の一つとして挙げられているし、文科省の出版物などのなかにも出てくるので、これからさらに増えてくるだろう（増えてくるといいなあ）と考えている。

三つの問いから考える

批判的思考の育成を考える際にまず言えるのは、いきなりビジネス書なりセミナーなりに飛びつくのは得策ではないということである。先にも述べたようにさまざまなものがあるし、何より、クリティカルシンキングの本であっても、書かれていることを単純に鵜呑みにするのはクリティカル批判的とはいえないと思うからである。

では何をしたらいいか。まずはいくつかの問いを自問自答してみてもどうだろうか。明確な順序があるわけではないのだが、第一の問いとして挙げたいのは、**どんな批判的思考力を育てたいか**である。ここでは詳しく触れないが、一口に批判的思考といってもさまざまな概念や定義があるからである（道田, 2003）。

しかし誤解を恐れずに大きくまとめるなら、合理性（論理性）、反省性（省察性）、批判性（懐疑性）の三つがキーワードであろう。このどれにどのぐらい重きを置くかの違いが、さまざまな概念の背後にある。そう考えると状況が

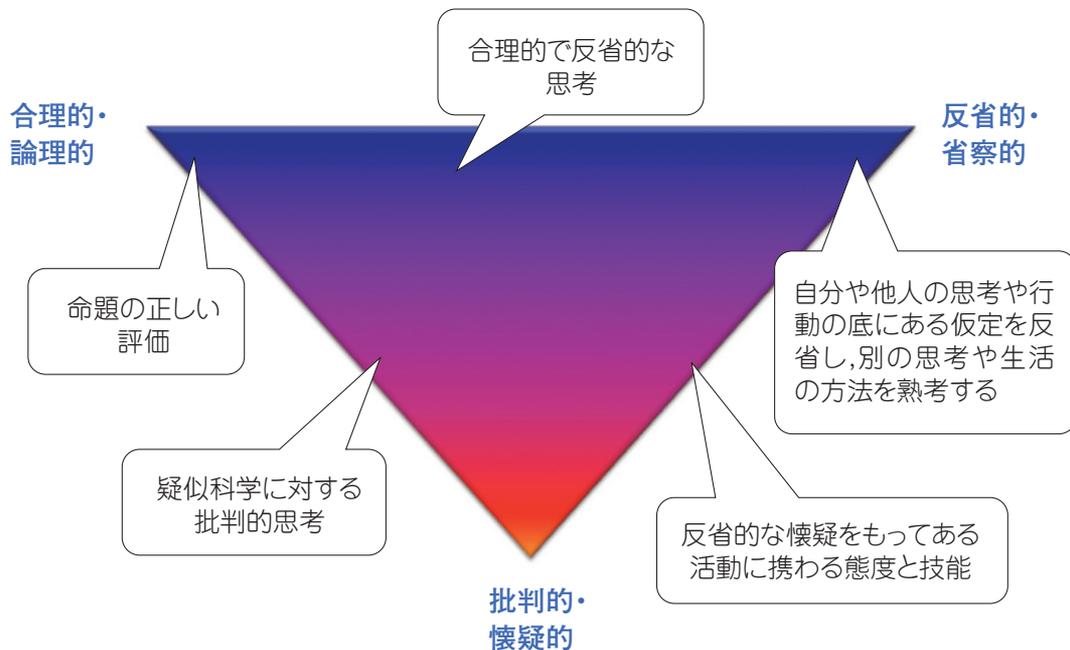


図1 批判的思考の大三角形

整理できるのではないかと考え、三角形で図示してみた（図1）。代表的な定義や捉え方も配置したので、キーワードだけでは考えにくければそれも参照すると、自分が扱いたい批判的思考がどのようなものか見えてくるかもしれない。

次は「なぜ、その批判的思考力を高めたいのか」である。これはさらに、必要性の問いと現状の問いの二つに分けて考えたほうがよさそうである。それが第二、第三の問いとなる。

第二の問いである必要性の問いとは、**その思考力がなぜ必要なのか（求められているのか）**である。その答えもいろいろだろうが、誤解を恐れずに大きくまとめると、学習者として学問分野をより良く学ぶため、賢い市民（消費者、有権者など）としてより良い市民生活を送るため、職業人として適切な思考や判断を行うため、あたりではないだろうか。もちろんこれを入り口として、さらに掘り下げていく必要がある。

現状の問い、すなわち**受講生の現状はどうか（何が欠けているか）**が第三の問いである。その答えは、相手をじっくり見るなかにしかない。普段から接しているなら、どこに不満や物足りなさを感じているのか、じっくり振り返ってみ

るといいだろう。このプロセスが欠けると、何のためにやっているかわからない、実態とそぐわない思考力育成になってしまいかねない。

大学生の実態については、わが国でもいくつか心理学の研究が行われている。論理性に関しては、論理的に問題のある文章に対して大学生は問題を論理的に指摘することがあまり得意ではない（道田, 2001）。的確に批判したり疑問を呈したりするのではなく、もっともらしい内容であれば鵜呑みにし、アヤシげに見える内容であれば頭から否定してしまう学生は少なくない。

このこととも関係するが、対立する二つの意見をきちんと理解して、そこから適切な結論を導き出すことも難しい（平山・楠見, 2004）。内容を理解する段階でも評価する段階でも、自分がもともと持っていた考えに引きずられてしまうからである。

これらの研究からは、論理性の弱さだけでなく、反省性の弱さも見てとれる。自分が持っていた考えとは切り離して情報を理解し、立ち止まってじっくり考えたり疑問を持ったりする、という姿勢の弱さである。

三つの問いから批判的思考力育成について考える

論理性を高めるために

では、情報の的確な理解や評価と関わるような論理性はどう高められるだろうか。このような力は、大学生がレポートを書く際にも、選挙で投票する際にも、ネット上で買い物レビューを検索して購入商品を決める際にも、仕事で何らかの判断を下す際にも重要である。

一つのやり方は、「ツール」を使うことだろう。どうやら人は、自分の考えと切り離して情報の骨組みをきちんと捉え、それに基づいて客観的に判断する、ということが苦手のようなのである。そこで情報を整理して目に見える形にするツールや、考えをガイドしてくれる枠組みがあると、論理的に考えやすくなる。

たとえば情報を、「問題－根拠－結論」という形でチャート的に整理したうえで、隠れた前提や根拠の確かさを検討するという批判的思考スキル教材がある（楠見他, 2010）。大学の初年次教育でこの教材を使い、それに加えて対立のあるテーマを小グループや全体で討論するという実践で、授業後の批判的思考能力が向上している（楠見・田中・平山, 2012）。

このほかにも、考えるための視点や問いを知ることもある種のツールになりうる。それを参照することで、より論理的に考えられるよう思考がガイドされるのである。沖林（2004）の実験では、大学生に学術論文を批判的に読ませる際に、ガイダンス資料を与えることで、批判的な読みができるようになっていく。

なおツールには多様なものがあり、ビジネス系のクリティカルシンキング本などでは、各種ツールの使い方の説明が中心となっている（残念なことに、ツールの意味や、それがどのように批判的思考や論理的思考のツールになっているのか、説明はほとんどないのだが……）。

反省性を高めるために

では、立ち止まってじっくり考え、疑問を持つという反省性はどうか。それには、「習慣化する」ことと「他人の力を利用する」ことが挙げられそうである。習慣化とは、文字通りいつもそうしようと努め

ることである。他人の力の利用とは、話し合ったり議論したりすることである。人はそれぞれ、視点や考え、持っている知識が違う。だからこそ他人は、自分の常識や考えが一つの見方に過ぎないことを気づかせてくれ、思考停止を阻止してくれる。

筆者はそのように考え、通常の授業のなかで「疑問を出すことを強制する」授業を行った（道田, 2011）。具体的には、担当グループが発表し、残りのグループがそれぞれ質問を作り、質疑応答する、これを授業前半に毎時間行った。質問について話し合う、質問される、他者の質問を聞くなど豊富な経験をすることで、質問力が向上した。

話し合うことの効果は、先に紹介した沖林（2004）が明らかにしている。先の実験で、ガイダンス資料とグループディスカッションを併用すると、適切な批判が最も多くなったのである。逆にガイダンス資料なしにディスカッションだけを行わせると、不適切な批判も増えてしまう。話し合うことでじっくり考えられたとしても、何らかのツールがないと、思考が適切な方向に深まっていけないことであろう。

大学生の（そして人一般にも共通する）実態として、もう一つ重要なことがある。批判的思考技能を持っているからといって、必ずしもそれが使われるとは限らない。目標や文脈が変われば、同じ状況であっても批判的思考を発揮するかの判断は変わるのである（田中・楠見, 2007）。

ということは、第二の問いである「その思考力がなぜ必要なのか」が明確に受講生と共有されている必要がある。そうでないと、現状としてある思考力が欠けているように見えても、それが能力の欠如なのか、「今は批判的に考えなくてもいい」と判断された結果なのかわからない。もし後者なら、必要なのはいつ批判的思考を働かせるのが効果的かというメタ認知的な判断力となり、教育で扱う内容が異なってくる。

自分の批判的思考を選ぶ

さて、以上の三つの問いを通して、育成すべ

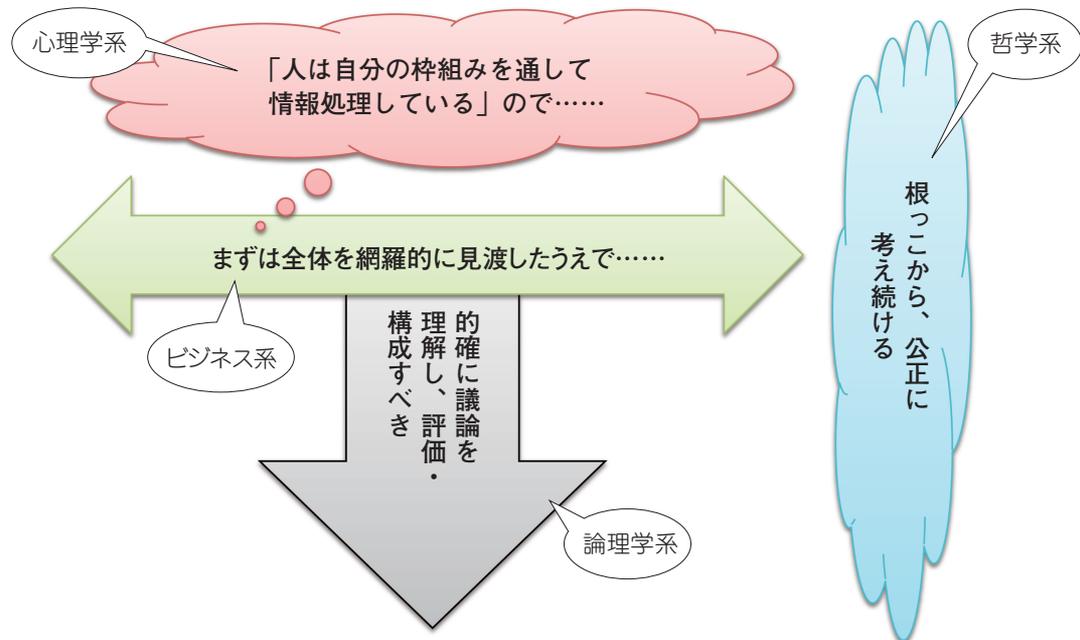


図2 いろいろなクリティカルシンキング (道田, 2012を改変)

き批判的思考の方向性が見えてきたのではないだろうか。ここに至ってようやく、あなたにとって適切なクリティカルシンキング本が選べるだろう。付け加えるなら、一般書として出されているクリティカルシンキング本には、論理学系、哲学系、ビジネス系、心理学系がある。論理学系は合理性重視、哲学系は反省性重視、ビジネス系はツール重視 (特に拡散系のツールに特徴がある)、心理学系は人の性質 (現状) 重視と、力点が異なっている (図2)。ここでは詳しく述べられないが、詳細は道田 (2012) で整理している。それだけでなく、クリティカルシンキング以外の分野からも豊かに学べる、ということも書いているので、興味がある人は参照していただければ幸いである。

本稿自身も、本稿の主張に従って「問い」というツールをガイドに、批判的思考の育成について考えてきた。これに加えて、人と話し合いながら、あるいは考えることを習慣化することで、さらに思考が深まるのではないかと思う。

文献

平山るみ・楠見孝 (2004) 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響：証拠評価と結論生

成課題を用いての検討. 『教育心理学研究』52, 186-198.

楠見孝・子安増生・道田泰司・林創・平山るみ・田中優子 (2010) 『クリティカルシンキング：情報を吟味・理解する力を鍛える』ベネッセコーポレーション

楠見孝・田中優子・平山るみ (2012) 批判的思考力を育成する大学初年次教育の実践と評価. 『認知科学』19, 69-82.

道田泰司 (2001) 日常的題材に対する大学生の批判的思考：態度と能力の学年差と専攻差. 『教育心理学研究』49, 41-49.

道田泰司 (2003) 批判的思考概念の多様性と根底イメージ. 『心理学評論』46, 617-639.

道田泰司 (2011) 授業においてさまざまな質問経験をすることが質問態度と質問力に及ぼす効果. 『教育心理学研究』59, 193-205.

道田泰司 (2012) 『最強のクリティカルシンキング・マップ：あなたに合った考え方を見つけよう』日本経済新聞出版社

沖林洋平 (2004) ガイダンスとグループディスカッションが学術論文の批判的な読みに及ぼす影響. 『教育心理学研究』52, 241-254.

田中優子・楠見孝 (2007) 批判的思考の使用判断に及ぼす目標と文脈の効果. 『教育心理学研究』55, 514-525.